六、鳥と蜜と経文

幻空さんの住居をのぞくと、生活道具や布団、書物などが乱雑に散らかっていた。
「片づけ中だ。どこかに座れ」
「そういわれても座る所がありません」
「蹴っ飛ばして場所を作れ。いま湯を沸かす」
わたしは囲炉裏の角に座る場所を確保した。薬缶を幻空さんは自在に掛け、布団を蹴飛ばして座った。
「長い間留守をしていたからな。人間界は疲れるよ。ここが一番いいと思うようになった」
「蝦夷地が、ですか」
「うん、ここは人間たちにまだ犯されていない自然がある。自然は豊かだ。ひとのこころよりずっと仏のこころに近い」
「蝦夷に二十年、といってましたね。もう蝦夷はすみずみまでしっているでしょう」
「うん、庭のようにな。そら、おまえさんのうしろにある紙の筒をとってごらん」
わたしは振りむき、紙の筒をとってわたした。幻空さんは筒のように巻いてあった紙をひらいた。一畳ほどの地図だった。
「蝦夷と、その周辺の地図だ。わしが踏破した地域や調査したところに、印しと書きこみがあるだろう」
なるほど、ほぼ全域にわたって、印しがついている。
「赤い印しが方々にありますが、これはなんですか？」
「それは辰砂(しんしゃ)のあるところ」
「辰砂？」
「赤土ともいうが、水銀を含む鉱脈だな」
「どうしてそんなものを探して歩いているのです？」
「わはは、探して歩くんじゃない。たまたまみつけたのだ。辰砂は密教にとって重要な意味があるんだ。密教の本山、高野山は辰砂の鉱脈の上にある。大師空海も辰砂を探して歩いたという。それがあるところは神聖な場所と考られたんだな。水銀は不老不死の仙薬としても古来珍重された。しかも金の精錬にも必要なものだ。だからわしは将来役に立つかもしれないと思って、みつけた場所を印してある」
わたしはしげしげと蝦夷の地図を眺めた。地図はかなり正確に描かれている。海岸線がとくに細密に描かれ、川も震えるように細い線を描いている。山には△印しがあり、その名称とともに約四百五十丈などと高さまで記入してある。視野を広げていくと、蝦夷は菱形をしていて、周囲を海に囲まれ、北と東にはおおきな陸地の一部

や群島がある。
「あっ！」と、わたしは声をあげた。
「どうした？」と、幻空さんが怪訝そうに顔をあげる。
「いえ、なんでもありません。あんまり正確にできているから、おどろいたのです」と、いいつくろったが、わたしの胸はどきどきと高鳴った。おどろくべき発見をしたのだ。
「これだけ正確な蝦夷図はな、じつはご禁制なのだ。オロシアが手に入れたら泣いて喜ぶ代物だよ」
「どこから手に入れたのです、幻空さんは」
「なんでもずけずけ聞いてくるな。おまえさんは。まあいい。それが若さの特権だからな。好奇心のない若者が増えているからな、昨今。じつはな、これをわしにみせてくれた人物がおる。わしはこの人物に出会ったためにここ蝦夷地に二十年も留まっているといっても過言ではない。これが今朝おまえさんに、なぜ蝦夷にいるか、と聞かれた質問の答えだよ」
「それでは答えになりませんよ」
「そうか。じゃあ、もうすこしくわしくいおう。その地図をみせられて、わしは感動したのだ。曼陀羅（まんだら）という文様を、密教は至上のものとするが、わしはその地図に曼陀羅をみたとき以上にこころがうち震えた。なにしろ、これこそ実在の世界だ。わたしが足をつけているまさにこの蝦夷だ。普段なら地平線とか、山とか、自分のまわりの狭い範囲しかみえないものを、こうして全貌をみることができる。それは仏の眼だ。仏の視座だ。それを仏ではない生身の人間が作りあげた。しかもすこしずつ確実に測り調べていったことを積みあげる。すると偉大なことがみえてくる。偉大な、しかも手に触れることのできる現実と真実が。曼陀羅がいかにすばらしいといわれても、それは畢竟、幻であり、空の世界だ。この宇宙は幻であり空であると思うから、わしは自分の名前にすらした。だが、その信念ががらがらと崩れた。あとでその人物と多くの論争をしたのだが、その論争によってわしは木っ端微塵にされた。それまでのわしの密教観はことごとく幻惑、かつ空疎と化した」
　幻空さんの口調はだんだん激してきた。わたしにはいささかむずかしいとも思えた。だが、ある予感が、さきほどからわたしを捕らえていた。それはわたしがさっきこの地図をみたときに発見した、おどろくべき事実とも重なっていた。
　幻空さんはつづける。
「悟りという突発的飛躍的な感覚、それをひととやりとりできないもどかしさに、わしは悩んでいた折りだった。わしらは論争の基本原則をまず、吟味したのだ。この地図の作成とおなじだ。確実なものを積みあげていって真理に達する、という原則だ。すると、密教の最高真実に達する方便が定まる。確実な方便が。それは先達が定

めた既製の方便や修法(ずほう)ではない。おのれのまわりにある、手に触れることのできる、確実に信じることができる事象から積みあげていく、ということだよ。わたしはもはや本山にもどる気がしない。あんな浮世離れした場所で、しかも天竺や唐の国から持ちこまれた古い方便を守っていても駄目だという気になった。この蝦夷に立つその足で、真実をみつけなければならんのだ」

「それで、その人物のことですが・・」

「そうか、そうか、すこし横道に逸れたかな。それでだ、その人物に地図を模写してもいいかと聞いたら、あっさり許諾してくれた。わしは三日かかって写しとった。その人物は恐ろしく博覧強記だったなあ。天文方兼書物方兼蛮書取調べの役人だったというが、和漢洋を問わず色々な異国の言葉に習熟していたな。博覧強記だけではない。洞察力に優れていたよ。わしはあんなに優れた人物をほかにしらない。高野山で八年学び信じたことを、一瞬のうちに吹き飛ばされた。すべてをまず吟味、懐疑することからはじめるべきことを、わしはその人物から学んだ」

「その人物のことですが・・」と、わたしはおずおずと口を挟む。

「なんだ？」と、熱弁をさまたげられて、幻空さんは不満顔だ。そしてふつふつと音を立てはじめた囲炉裏の薬缶をとりあげた。

「その人物はなんという名ですか？」と、わたしの胸も薬缶のようにふつふつと沸騰している。

「そのひとは、だな・・」と、湯飲み茶碗をふたつ並べる。

「そのひとは？」

「うん、名前をいうとそのひとに迷惑がかかるな。だってご禁制の地図をわしに複写させたのだから」

「でも、それは何十年もまえのことでしょう？」と、わたしは質問を変えてみる。幻空さんは茶をいれ、わたしにもさしだす。

「うん、もう十五年もまえになるな」

わたしはもう、我慢がならずに聞いた。

「そのひとの名は雨宮甚内、ではありませんか？」

ぶふっと、幻空さんは飲みかけた茶を吹きだした。

「ど、どうしてしっている？」

「雨宮甚内はわたしの父です」

「なに、おまえさんの父だと？」そういって、しげしげとわたしの顔をみていった。

「馬之助としか聞かなかったが、雨宮馬之助というのか、おまえさんは・・でも、似ていないな」

その言葉がわたしの胸をえぐる。

「だが、一体これはどういうわけだ。なぜ、雨宮甚内殿の子息がここにいる？」

わたしは手短かに父を探索することになった経緯を話した。壷を盗まれてから、幕府に追われていることも話した。だが壷の内側の絵と蜜壷のことは伏せた。
「そうか。雨宮殿なら、幕府に追われるのも止むを得ないな」
「どうしてです？」
「想像だがね。雨宮殿は幕府の禁をいくつか犯したろう」
「どんな？」
「ひとつは、あの正確な蝦夷周辺図だ。あれは蝦夷の地だけではなく、日本人が測地できない離島、広範囲の地やオロシアの一部まで描かれている。だから、オロシア側が作った地図と情報交換しなければできないはずだ。つまり日本側の測地図をオロシアに渡し、オロシア側の地図を受けとったと考えられる」
「なぜ、父がそんなことをしたと、幻空さんは思うのです？」
「真実は独占すべきでない、とかいっていたからな。ふたつ目の追われる理由は、真実を求めて禁を犯してまで異国に渡った可能性がある。みっつ目は非常に重要な発見をしながら、幕府に報告せず独占した義務違反」
「それは矛盾しますね。真実を独占すべきでないといいながら、独占する・・」
「それもそうだな」
「もうすこしくわしく教えてください」
「説明すると長くなるな」と、茶をすする。話してもいいが、また途中で話の腰を折られたくないという顔つきだ。
「それに雨宮殿とやった宗教論争にも関わる。ちょいとおまえさんにはむずかしい」
「いいえ。かまいません。多少むずかしくても黙って聞きます。わたしは父のことをすこしでもしりたいのです。赤子のときに父とわかれたきり、わたしは父をまったくしらないのです。かなしいことです、まことに・・」と、わたしは泣き落としにでた。
「ほう、それはあわれだな。そうか、では・・話して聞かそう」と、幻空さんはわたしの作戦に引っかかった。
「うむ。もうだいぶまえのことだから、詳しいことは覚えていないな。だが、いまでも鮮烈に覚えていることがいくつかある。そのいくつかこそいまにして思えば、甚内殿の消息と関係がありそうだ。そうだな。雨宮殿の論争でいまでも忘れない言葉は、『学問とは、なんぞや』ということだな。甚内殿はこういった。『学問とは実在と真実を探求すること。宇宙万物の事象の奥にある法則性を探ること。そして学問の大原則とは、学問の対象になる事象はだれが観測しても、だれがくりかえしても、おなじ結果、おなじ事象となるものに限定される』と。このあと、長い学問と宗教をめぐる論争があ

るのだが、ここではやめる。だが、わしがひそかに感銘を受けたのは、甚内殿の提示した尺度によって幻惑と実在とが識別可能になることだった。修行の果てに大日如来をみたとしてもだ。ずっと祈念しつづけ精神も肉体も疲弊しているのだから、幻惑や錯乱ではないとどうしていえる？　幻覚即覚醒ないし認識即実在や否や、という問題だ。おまえさんにはむずかしいかな」

「いえ、よくわかります。わたしだって幻覚をよくみますから。つまりお化けをみたからお化けが実在するわけではない、ということでしょう」

「お化けと仏性とをいっしょにするな。そうそう、密教についてこういう論争をしたな・・

波羅蜜多という経があるのだが、そこにこうある。

『醍醐（だいご）の味は能く諸病を除き、もろもろの有情（うじょう）をして身心安楽ならしむ』

醍醐というのは最高の食べものことだ。経文を醍醐にたとえて、味わい深く、病にもこころの平安にも能く効くとしている。醍醐とは、乳を発酵させた蘇（そ）をさらに熟成させたものとされている。それは密教が発祥発達した西域では日常普通のものだからだ。だが、と甚内殿はいう。本当の醍醐とは、蜜なのだ、と」

「蜜？」と、わたしは思わず声をあげる。

「そう。蜜だ。蜜は極めて微量にしか得ることがなかった。それは王族や天子にしか手に入らない妙薬。不老長寿の仙薬であった。醍醐は腐敗する。しかし蜜は腐敗しない。異国では枯骸仏にするために最終段階で蜜を詰めたそうだ。そして蜜を手に入れることこそ、歴代の天子の隠れた願いであり、究極の目的だった・・」

「その経文の名も、蜜、なんとか、といいませんでしたか？」

「こう、書く」と、矢立てをとって紙にさらさらと漢字を書き、読みを振る。達筆だった。

波羅蜜多（はらみった）

「はらみった・・どういう意味です？」

「そこだ。いいかい。本来ハラミッタとは梵語だ。甚内殿はサンスクリット語ともいったがね。梵語のパーラミッタという言葉をそのまま音写した、というのが仏教界の教えるところだ。その梵語は、『この迷いの世界から悟りの世界である彼岸に渡る』という意味だ。ところが甚内殿は、ここで不思議な謎解きをしてみせたのだ」

幻空さんはここで言葉を切り、いたずらそうに片目でわたしをみた。

「甚内殿はいう。『わたしは多言語の翻訳に長年携わってきたから、

翻訳者の気持ちをよくしっている。手に負えないからそのまま音写する、というは翻訳者にとって最も恥とするところだ。翻訳者がひそかに誇りに思うことは、原音の響きや音韻をそのままのこしながら、意味を正確に翻訳できたときだ。そのときの翻訳者の喜びは無上である。もし翻訳不能だったから原音を音写したのだろうと、他者から思われてもいささかもいとわない。他人に認知されないこともまた、翻訳者のひそかな喜びだからだ。その秘密は凡人には解けるまいとひそかに自負するから』とね。そういわれてみれば、例は悪いが、歌留多（カルタ）、なんぞ巧いよな」

「すると、はらみった、は音写ではない、と父はいうのですね」

「そう」

「すると、どうなるのです？」　わたしも謎解きをしたくなり、幻空さんが『波羅蜜多』と書いてくれた紙をとりあげた。

「波はわかりますが、羅、とは？」

「羅とは、羅列の羅。つまり連なること」

「すると、どうなります？」

「『波、連なり、蜜、多し』となる」

「つまり、それがパーラミッタ、悟りの世界に渡ること？」

「そう。悟りの世界とは、波濤を越え、蜜の多きところだ、と。そしてさらにいう。密教、の密は、古代においては、蜜とも書き、同義である。蜜が非常にわずかしか採れず、しかもひそかなものだったからだ、と。密教とは蜜の教え・・」

「ふーん」　わたしにもなにか引っかかるところがあった。

「そして、さらにおどろくべきことをいった。それによって、わしの密教観はくつがえった」

「それを話してください」

「すこしむずかしくなるぞ」

「かまいません。是非」

「おまえさんでも、般若心経（はんにゃしんぎょう）くらいはしっているな。最後の行がやはり音写、とされている。漢訳した玄奘三蔵も、ここだけは不翻の方がよい、と考えたといわれる。それで、こう音写した」

　幻空さんはまた筆をとって紙にさらさらと書き、漢字の横に読みをふった。

羯諦羯諦（ぎやていぎやてい）　波羅羯諦（はらぎやてい）　波羅僧羯諦（はらそうぎやてい）　菩提娑婆詞（ぼじそわか）

「どうだ、意味がわかるか？」

「まったくわかりません」

「そう。漢語の羅列で意味不明だ」

「どうしてこんなことをしたのですかね、一番大切なところでしょ

う？　もし大切なところを不翻とするなら、全部そうするのが当然だ。そこだけ投げてしまうのは変だ」
「おまえさんもやはり甚内殿の子だな。おなじようなことをいうな。『このサンスクリットの原語の意味は・・』と、甚内殿は梵語にも詳しいので、こう訳した。
『往け往け、彼方の岸に。たどり着く者たちの、喜びこそあれ』」
「先ほどの、波羅蜜多と、なんとなく共通してますね。むこう岸だというところ。ほら、波羅という文字だって、ここにもある」
「そこで、甚内殿の説だ。翻訳者の玄奘三蔵は、この至高の韻文において、不翻のまま放置した、などということは絶対にあり得ない。翻訳者の能力をまさに試されるこの行において、玄奘三蔵は超人的な能力を発揮したはずだ。それこそ僧としての試練であり、それこそ玄奘三蔵の持てる英知のすべてを傾注した・・」
　幻空さんは紙をわたしの手から奪いとる。
「じつはわしも甚内殿の説に、共鳴したのだ。なぜここを不翻としたかについてはいろんな説が古来ある。しかし、経文を翻訳すると決意した以上はどんなに難解であっても訳し切ってみせてこそ潔い、とわしは思っていた。だから、翻訳すると一字一句にとらわれるからだというような、わけのわからない説明を聞くと、けつの穴がむずむずしていた」
「それで結局、玄奘三蔵の漢訳はどういう意味になるのです？」と、わたしは催促した。わたしも父の説に共鳴したからだ。
「いいか、おどろくな」と、幻空さんはまるで自説のように自慢気にわたしに説明する。
「羯。漢語では去勢された黒い羊を意味する。転じて、えびす、つまり匈奴、蛮人蛮地を指す。わが国でいえば、蝦夷だ。
諦。わが国ではこれを、あきらめ、と読むが、漢語本来の意味は、あきらかにする。見極める、という意味である。
　すると、羯諦羯諦は、こうなる。
　蝦夷を見極めよ、蝦夷を探せ。
　そのあとにつづく、波羅、はすでに理解しているように、波濤を越えて、だ。だから、波羅羯諦　波羅僧羯諦は、こうなる。
　波濤を越えて蝦夷を見極めよ。波濤を越えて僧たちよ、探せ。
　僧とは、ひとりではなく、本来は数人の比丘をいう。さて、最後の菩提娑婆詞だ。菩提は梵語ボージ、悟りの音写だが、
　苦は、漢語では祭りに使う草、祭り草を指す。
　提は、携える、捧げ持つという意味だ。そして鳥が飛ぶ様も指す。
　沙安波安とは、翻る、舞う。だから娑婆兒とは海鳥をいうんだ。
　さて最後の詞。これはもちろん、言葉、韻文だ。

すると、いいか。
羯諦羯諦　波羅羯諦　波羅僧羯諦　菩提娑婆詞は、あっとおどろく意味になる。
蝦夷を見極めよ、波濤を越えて僧たちよ、蝦夷を探せ。祭りの草を携え、鳥のように舞い、歌え・・」

わたしはしばらく口が聞けなかった。奇妙な一致が、経文とわたしの状況とにあるのだ。
先ほどの蜜、そして蝦夷、波濤と彼岸、波濤をこえてたどりついたここ厚岸、僧と幻空さん、鳥と歌、鳥笛とその調べ・・わたしにあとひとつ欠けているのは、祭り草だけだ。
父が解いた般若心経の偈が頭の中で踊る。そして、まさにその父を蝦夷に探そうとしている。なんという因果！
「な、不思議だろう」と、幻空さんが片目を輝かせていう。
「わしにはこの雨宮訳の方が、妙にぴったりくるんだ。詩魂があるんだ。こっちの方が・・

蜜多きところあり。僧よ、蝦夷を見極めよ。波濤を越えよ。祭り草を携えて、踊れ、鳥のように、そして歌え・・

ここには、満ちあふれる歓喜がある。大地の歌がある。生きとし生けるものたちの、いのちの輝きがある。だから、だからこそ、わしは蝦夷にいるんだ。どうだ、わかったろう！　そして思う。玄奘漢訳はまさに最高の訳だ。なぜなら、甚内殿がいうように、原音の響き、音韻をそのまま活かしながら、意味も損なわずに、写し切った。いや、むしろ躍動感、詩的情念において原典を越えた。玄奘三蔵の、してやったり！　と満足した顔が浮かぶ。そして、雨宮訳もまた褒め讃えられよ。何百年、わかったふりをしてちっともわかっていなかったわが国の仏教者たち・・空海ですら雨宮訳の簡潔直裁さには赤面するよ」
悲しいかな、わたしには偉大な父の姿がちっとも浮かばない。
「さっき、蘇（そ）と醍醐（だいご）の話をしたよな。蘇は密教の護摩修法において護摩壇に捧げるが、それだけではないよ。蜜も共に捧げるのが定法だ。蘇なんか蝦夷では手に入らない。だから、蜜をわしは使うしかない。とても必要なんだ」
「どうやって蝦夷で手に入れるのです？」
「波濤を越えて、蜜多きところより、手に入れる」
「冗談でしょう」
「いや、本当だ。蝦夷の北東に島が転々と連なっているだろう。その島のどこかに、蜜がふんだんにとれるところがあるらしい。滅多

に手に入らないが、かつてそこで採取したという蜜をわずかに得たことがある」

わたしは改めて蝦夷の地図を眺めた。これは父が作製したものの複写だ。わたしが先ほど驚愕したのは、この地図に、割れた壷の破片に描かれていた絵とそっくりな地形を発見したからだ。

鳥の羽根に似たのは、北東の海のかなたのカムチャツカと記された地、鳥の尾にみえたのは樺太。尾と連なる嘴は知床岬と納沙布岬が形作る湾とそこから東に延びる国後、択捉、クリル列島だった。

壷の絵は、あきらかに蝦夷周辺の地理を描いたものだ。

蜜多きところを指し示すためか・・

そのとき、幻空さんが不吉なことをいった。

「だがな、甚内殿は最後に首をかしげてこういったんだ。『待てよ。この偈はこうも解釈できるな。羯諦の諦は、啼と同義だ。すると』」

「え？」

「『ぎゃあと啼け、ぎゃあと啼け、となる。そして波羅の羅とは、鳥を捕まえる網のことでもある』と・・」

鳥を捕まえるという鳥飼いの姿が、わたしの目に浮かんだ。

破線部分が壷の破片

七、冬景色

わたしはその冬を、冬眠する動物のように家に閉じこもって、春を待った。

雲をつかむようだった父の探索が、なにか形がみえてきた。とくに幻空さんの話を聞いてから、父が身近かにおおきくみえてきた。

しかし父のその後の足取りについては、杳(よう)としてわからない。幻空さんと厚岸で出会い論争をしたあと、何処かに去ったという。

猪平が聞いた父のひと言。不思議な鳥がいるそうだ・・

父が解いた経文。波の果てに、密多きところあり・・蝦夷を探せ、鳥のように舞い、歌え・・

いくつもの謎が渦巻き絡み合ってアイヌ刺繍文様を織り成した。

わたしは家に閉じこめられている間に、コタンで採録したアイヌの言葉を整理することにした。いろは順に並べ換えたり、発音を正確に表すための表記法などを工夫した。

さらに、コタンの古老たちから聞いたユッカルや、メノコたちのウポポを整理した。ユッカルはアイヌの物語りだが、文字を持たないアイヌにはそれを専門に伝承する語り部がいる。ウポポは祭りの夜などにメノコたちが歌い踊るものだ。わたしにも聞きとれたやさしいものがあり、その幾つかをここに書き写しておく。

一、ユッカル（語り部の序）

わたしは海の風
わたしは海の波
わたしは海の轟き
わたしは絶壁の鷹
イヤ、ホウ
わたしは朝露
わたしは川の鮭
わたしは森の湖
わたしは大きな角の鹿
イヤ、ホウ
わたしは語る
わたしの言葉は種
やがて、ひとのこころに花開く

二、ウポポ（海で死んだ者を悼む）

波が岸から去っていく
死者の髪のような
おぞましい藻をのこして
けれど、わたしのかなしみも
岸から去っていく
アーホイヤ
けれど、波はまた寄せてくる
わたしのこころにも寄せてくる
アーホイヤ
死んでしまったひとの思い出が・・

三、ヒウリ、巨大な鳥

東の方のどこかに、神（カムイ）の怒りの島がある。いつも火を噴き、地が鳴動しているので、だれも近寄らない。

そこにヒウリという巨大な怪鳥が棲むいい伝えがある。

あるとき、嵐でその島に流れついた漁師たちが水を求めて丘に登ると、蜂の大群に襲われ、洞穴に逃げこんだ。そこに、ひとの背丈ほどもある羽根が落ちていた。するとその洞窟の奥で、ばさばさと羽ばたく音が響いた。おどろいた漁師たちは羽根をかついで丘を駆けおり、皮舟に乗って急いで島をはなれた。

みろ！　とひとりが叫ぶ。沖から漁師たちが振り返った。火を噴く山のあたりに、巨大な怪鳥が飛んでいた、という。

（東方のアイヌ、チュプカウンクルの伝説らしい）

四、フムフム（しまふくろう）

あやまってフムフムの左の目玉を弓で射た者がある。すると、その者の右の目玉に痛みが走り、失明した。

（このいい伝えは、片目の幻空さんを思い起こすので、ここに記す。ただし幻空さんの失明の原因はしらない）

五、フムフム（遊び歌）

フムフム
小枝にあたるよ
フムフム
昼間、おまえはみえるのかい
（目隠しした子供を小枝でからかいながら、みなで囃す）

八、トントチップ

空気までが凍り、氷の粉となってきらきらと光った。そのきらめきの中に、はやくも春のきざしがひそんでいた。

浜に川から流れくだった氷塊がごろごろと寄せ集まった。氷塊はたがいに擦り合って、きれいな透明の玉になった。

リスがいそがしく枝の上を飛びまわりはじめ、弥生月になった。

もう、春がそこまでやってきている。雪が解けた日だまりにスミレが花を咲かせ、ふきのとうが頭をだす。

ツグミが虫をねらって地にしきりに降りてくる。

やがて、鰊がやってきた。海面は鰊の背鰭で波のようにうねった。コタンのアイヌたちは浜に降りて、鰊漁に精をだした。捕った鰊は釜で煮たり、頭に紐をとおして浜辺に干した。

森でも猟が忙しくなる。まだ冬眠から覚めやらぬ寝ぼけ熊を襲う。穴にのこった子熊を捕らえて連れ帰り、秋の熊祭りイヨマンテの生け贄にする。

雪解けで足をとられ動きが鈍る鹿をねらうのも、この時期だ。

アイヌたちも子供まで駆りだされて、待ちわびた獲物を集めるのに忙しい。この時期に獲物がすくないとその一年は困るのだ。

わたしはしばらくコタンにでかけるのを遠慮した。だれもわたしの相手などしていられないだろう。

幻空さんはどうしているのだろう。信仰を抱いているひとは強いと思う。

めずらしいことに、シトカがわたしの家にやってきた。鰊漁の帰りに寄ったそうだ。鰊をたくさん持ってきてくれた。

長老が東部アイヌの集まりにでかけたそうだ。なにか朗報があるといいな、といって、シトカはすぐ帰った。やる仕事がいっぱいあるのにわざわざ寄ってくれたのだ。しばらく会わないうちに、シトカは立派な若者になった。体がひとまわりおおきくなり、堂々としている。将来は長老の跡目をついで、立派なコタンの長になるだろう。

シトカもわたしをみて、「おう、おおきくなったな」と、いった。ふたりとも成長のいちじるしい年齢だから、ふきのとうのように、あっという間におおきくなる。

お悠さんもきっと麗しくなっていると思う。恋文を射込んだあの若侍は、とすこし気になる。

鳥笛はますます巧みになった。泉がわきでるように奏でられる。春の到来とともに浮き浮きした調子が多くなった。

しかし春が近づくにつれて、追っ手が厚岸に伸びてくるだろう。凍結されていた恐怖が解け、わたしのこころを不安で濡らす。

春、恐ろしいものがある。嵐だ。前触れもなくやってくる。風が吹きはじめたな、と思ったときは、もう大波が牙を剥いている。冬なら兆しがある。厚い雲の帯びが集まり渦を巻く。やがてごうごうと風が攻めてきて、何日も居座る。ところが、春の嵐はちがう。空が晴れていい天気なのに、いきなり疾風がくる。逃げ足もまた早い。だから海の遭難は春が多いそうだ。冬は用心して海にでないが、春になるとつい陽気に誘われる。鰊漁に夢中になっているうちに、春の嵐に襲われて帰らぬひととなることが多い、という。

だから突発する春の嵐を恐れて、江戸から厚岸に直行する船便は滅多にない。荷物もやってこないし、ひともこない。だが陸路は開かれ、松前や函館から海岸伝いにひとがくる。人相書きや手配書もまわってくるかもしれない。

鰊漁のアイヌが、長老が帰ってきた、と告げる。わたしは川をのぼって、コタンにでかけた。

長老はわたしの顔をみると、待っていたぞと、わたしの肩をたたいて中に招き入れた。なにかいいたくてたまらないのに、わざと囲炉裏の火をかき立てたり、湯を飲んだり、煙草を吸ったりしている。シトカの帰りを待っているのだ。

わたしは期待して囲炉裏に座っていた。シトカがもどってきて、長老はやっと話しはじめた。

「馬之助さん。おまえさんの父のことだがな。集まりで、みんなに聞いてみたよ。

『和人で、雨宮甚内というひとをしるものはいないか』と。

ところが名前をいっても答えがない。で、聞き直した。

『十五年ほどまえに調査にきたが、ひとりでどこかにいったまま行方不明になった。その頃に案内を頼まれ、それきり帰ってこなかった和人はいなかったか』と。

すると、択捉の長人が思いだしてくれた。

『そういえばその頃、択捉に変わった和人がやってきた。島にきていたクリルたちからトントチップを習っていた。和人でトントチップをあんなに熱心に覚えようとしたのは、あとにも先にもいない。それだけではない。調べ仕事もなんでも熱心だった。遠眼鏡や拡大鏡で鳥や草を一日中眺めていた』

『トントチップの方はそれで、どうなった？』と、わしも聞いた。

トントチップというのはな、この辺のアイヌは使わないが、ずっと東のクリルたちや、もっと遠くのアリュートたちが漁に使う舟のことだ。海豹の皮を張った皮舟で、軽くて細く、水も入らないようになっており、魚のように早い。だが、ひっくりかえりやすい。だからわしらアイヌでもいやがって使わない。しかしトントチップと

いう舟は、巧くなるとひっくりかえったまま、ひょいと起きあがれる。その和人はその技術まで習得してしまったそうだ。そうなれば魚とおなじだから、こわいものはない。どんな荒海でも鳥のように進めるし、どんな島でも上陸できる。まあ、説明が長くなったが、じつはわしも興味があったのだ、その和人がどうしてトントチップなどに夢中になったのか・・」

長老は煙草を詰め直し、一服する。トントチップのことは猪平から聞いていた。父ははじめの蝦夷行でその有用性を認め、ふたたびもどってきて、ひとりでも操れるように習熟しようとしたのかもしれない。わたしは長老の言葉を待った。長老は煙りを吐いた。

「それでな、択捉の同胞はいった。

『ついにその和人はトントチップを買い受けて、自分でトントチップを操って択捉をでていった。さらに東の島へむかったようだ』と」

「東の島というのは、どこです？」

「いや、わしもしらん。アイヌが住むのは択捉島あたり、までだ。その先までいったアイヌもいるが、潮の流れが早く、しかも舟が上陸できるような島がほとんどないらしい。うっかり東にいくとアイヌの重い舟ではもどってこれなくなる。だから、その方面に住むクリルたちはトントチップのような軽く早い舟を使うんだろうな」

「東の島は幾つもあるんですか？」

「よくはしらないが、何十という小島が首輪の玉のように連なっているそうだ。ほとんどが火を噴く島だという。すぐ隣の国後島でもチャチャヌプリが火を噴くがな」

「クリルたちはトントチップで択捉までくるのでしょう？」

「そうさ。クリルたちはわしらアイヌと交易にくる。アイヌから熊の毛皮や織物を仕入れる」

「で、クリルたちはなにをかわりに持ってくるのです？」

「うん、そうだな。ラッコの毛皮かな。それに鯨や鯱の肉や脂。クリルは勇猛なんだ。あの皮舟トントチップで荒海の中で鯨を追うんだからな」

「ほかにはなにを持ってくるんです？」と、わたしはしつこく食いさがる。ある予感がする。

「そう・・滅多にはないが、蜜を持ってくる、という」

やっぱり、とわたしは思った。蜜、蜜なのだ。波の果てに、蜜多き島が、きっとあるのだ。父はそこにひとり調査にいったのだ。

「蜜・・なんの蜜ですか？」

「蜂の蜜だろう」

「蜂蜜なら、蝦夷地だって採れるでしょう。熊が木に登って好物の蜂の巣を叩き落とす、と聞きましたよ」

「その、クリルたちが持ってくる蜂蜜は、毎年採れるここらの蜜と

はちがうんだ。蜂も花もちがう種類で、何年に一度しか採れない。しかも採るのはいのちがけだそうだ。だが、その蜜はあらゆる病気に効くし、年とった者が若返る不思議な力がある。だから、ほんのわずかの量でも、熊の毛皮、百枚に値する」
「どうして、蜜の採取がいのちがけなのですか？」
「うん、あまりよくはしらないが、いい伝えでは、そこに怪物が棲んでいるらしい」
「どんな怪物です？」
「おおきな鳥だ、という」
嗚呼！　すこしずつ、すこしずつ、一枚一枚紗をはがしていくように、父の姿がみえてくる。
ひとり、トントチップという舟を操り、荒海に乗りだす父。目指すは火を噴く島のひとつ。おおきな鳥が棲むという。何年に一度しか採取できない蜜を求めて。
なぜ、何年に一度なのか。その鳥とは、なんなのか・・
わたし自身、好奇心で身を焦がしそうなのだから、真理探求に燃える父なら、いてもたってもいられなかったはずだ。父が蓬莱山の伝説を信じて無謀な冒険をするはずはない。学問とは実在と真実を探求すること。学問の対象とはだれにでも観測できる事象であること、といい切った父だ。多くの確証をつかんでいたのだ。だからこそ、父もいのちがけでその調査に赴いた。
わたしは、いつのまにか、父の気持ちに同化していた。父はわたしになり、父はわたしだった。父はやはりわたしの本当の父なのだ。確信が胸を締めつけた。わたしははからずも涙した。
「どうした、馬之助。泣いたりして・・」と、シカトが慰める。シカトの父は和人に殺され、シカトには父がいない。そう思うと、一層涙があふれた。長老がわたしの涙をみて慰める。
「お父さんはきっと、生きているよ。な、きっと生きている。もうすこししたら、択捉へ渡れ。わしが択捉の長人におまえさんのことを話しておいたよ。力を貸してくれるようにな」
「うん、択捉まではおれが舟で送ってやるぞ。おれだって舟を漕がせたら、この辺では右にでる者はないんだ」と、シトカは胸を張る。
「もっともアイヌの板張りチップだがな。その皮張りトントチップではないよ」と、あわててつけ加えた。